長期欠席児童を対象としたキャンプが参加者の情動知能に与える影響

中島　諒　（生涯スポーツ学科　野外スポーツコース）
指導教員　黒澤　毅

キーワード：長期欠席児童，キャンプ，情動知能

1．緒言

現代の教育問題として，長期欠席児童問題[4]があり，その人数は年々増加傾向にある．その原因の1つに，直接体験の減少による感情制御能力や社会的能力の低下といった情動知能の問題[4]が挙げられる．情動知能とは，「自己認知・自己管理・社会認識・人間関係の管理」[1]のことである．また，飯田ら[2]は，キャンプ療法は登校拒否の一つの解決法と述べている．

そこで本研究は，長期欠席児童を対象としたキャンプが参加者の情動知能に与える影響を明らかにすることを目的とする．

2．研究方法

【対象者】A県で青少年の自立支援事業の一環として2017年11月7~9日(B日程)，28~30日(C日程)に不登校児童・生徒を対象に行われたTキャンプの参加者である小学4年生~中学2年生の計19人を対象者とした(表1)．

表1　参加者学年　（男：女）

	小学4年生	小学5年生	小学6年生	中学1年生	中学2年生	合計
B日程	1 (1:0)	2 (2:0)	2 (1:1)	3 (1:2)	0 (0:0)	8 (5:3)
C日程	0 (0:0)	2 (1:1)	3 (2:1)	2 (0:2)	4 (2:2)	11 (5:6)

【調査内容】皆川ら[3]が作成した児童用情動知能尺度(3領域12因子36項目)を，筆者が独自に修正したアンケート(2領域6因子12項目)を使用し，5件法で回答を求めた．キャンプ前(Pre)，キャンプ後(Post)の計2回実施した．

3．結果と考察

キャンプに参加した子どもの情動知能得点の変化を明らかにするために，Pre-Post間の平均と標準偏差を領域別に算出し，検定を行った(表2)．

表2　情動知能得点のPre-Post間の平均と標準偏差及び検定結果

N=19	Pre M(SD)	Post M(SD)	t値/Z値
全体得点	31.6(6.39)	59.6(9.32)	t=17.80 ***
自己対応	17.9(3.66)	30.8(4.45)	Z=-3.84 ***
対人対応	13.7(3.35)	28.7(5.36)	Z=-3.83 ***

その結果，情動知能全体得点，自己対応，対人対応のPre-Post間において有意な向上が見られ，キャンプ体験が子どもの情動知能に影響を与えたことが明らかとなった．洲崎[5]は「活動を通して新たな自己を発見したり，他者との関わりの中で自分自身を見つめる目を育てることができる」と述べている．子ども達は，一般生徒に比べ不安感や孤独感が強いように感じたが，キャンプ活動を通して，自分の考えや相手の考えを理解するといった話し合いの機会や，ハイキングでの自分の感情を見直す機会が多くあったことが向上の要因と考える．

学年別に見ると，小学4年生を除く4学年において向上が見られた．キャンプ開始時は1人で馴染めない子どもも多く，スタッフが声掛けする姿が何度も見られたが，2日目には課題解決・目標達成のため，自発的に話し合う姿が見られ，自分自身の感情だけでなく，他者の感情を聞き，自分の中に取り入れ自分とは違った考えに触れることができたことが向上の要因であると考える．

4．まとめ

キャンプに参加した長期欠席児童(不登校)は，様々なプログラムを経験し，自己の感情と向き合い他者の考えを理解することで，情動知能が向上することが明らかとなった．継続的に参加することで，欠席を繰り返す児童が減少するのではないかと考える．

引用・参考文献
1) DANIEL GOLEMAN，土屋 京子 訳(1996)：EQ~こころの知能指数，講談社，東京
2) 飯田 稔，中野 友博(1992)：登校拒否中学生の不安と自己概念に及ぼすキャンプ療法の効果について，筑波大学運動学研究 8，p69-79
3) 皆川 直凡，片瀬 力丸，大竹 恵子，島井 哲志(2010)：児童用情動知能尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討，鳴門教育大学研究紀要，第25巻，p31-36
4) 文部科学省(2015)：児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査(確定値)，p62，p74
5) 洲崎 洋昭，伊藤 康安浩，軸丸 勇士(2008)：体験学習法が子どもの「自己-他者関係」「自己認識」に及ぼす影響に関する研究~湯布院町ジュニアリーダー育成プログラムの分析を通して~，日本生活体験学習学会誌，第8号，33-46